

中学校英語授業におけるダイナミック・アセスメントの可能性 —生徒の振り返りを用いて—

市 川 竜 朗（二本松市立二本松第二中学校）

秋 山 朝 康（文教大学文学部）

Exploring the Potential of Applying Dynamic Assessment in Junior High School
English Classes Based on Student Reflections

ICHIKAWA TATSURO, AKIYAMA TOMOYASU

(Nihonmatsu 2nd junior high school, Fukushima)

(Faculty of Literature, Bunkyo University)

要 旨

本研究は、ヴィゴツキーの「最近接発達領域（ZPD）」に基づく動的評価（DA）の中学校英語授業への応用に焦点をあてる。主な目的はDAを活用して自力で課題の達成は困難であるが、支援を受けることで成功できる生徒を特定し、指導と評価の連携を強化することにあります。このように、指導と評価において有望な可能性を秘めているにもかかわらず、DAアプローチを用いた研究は中学校の教育現場ではほとんど行われていない。したがって、本研究はどのタイミングで、どのような支援が生徒にとって適切であるかを探ることを目的とする。約50名の中学生を対象に、Googleフォームを用いて3か月間にわたって授業の到達目標に対する生徒の振り返りを収集し、それを3つのタイプに分類して、適切な支援方法を見出す可能性について論じる。本研究は中学校英語授業におけるDAアプローチの改善点や修正の可能性について言及する。

1. はじめに

教師は生徒に日常的にフィードバックや支援を行っている。その支援は教師の長年の経験とひらめきによることが多いように思う。そこで本研究はVygotsky（1987）が提唱したダイナミック・アセスメント（Dynamic Assessment 以下DAとする）理論を元に、生徒の授業の振り返りのコメントを活用し、適切に生徒へ支援することがどの程度可能であるか検討する。

具体的にはDAの中心概念の一つである発達の最近接領域（Zone of proximal development, 以下ZPDとする）を中学校英語の授業に応用し、生徒の授業の振り返りのコメント（例えば、課題をやってみて自身ができなかったこと又はできないことなど）を書いて

もらい、教師が生徒にどのように支援が可能なのかを検証する。

2. 先行研究

2.1 DAとZPD（発達の最近接領域）

Vygotsky（1987）の社会文化理論の要旨は社会環境の中で他人から支援を受けながら、言葉という道具を使用して人は認知を発達し、社会的な関わりを通じて人は新しい認識の形成が促進される。これを教室に当てはめると教師や生徒とのインタラクション（やり取り）をすることにより、生徒自身が新たに能力を獲得し成長することと言える。Lantolf and Poehner（2014, p14）は社会文化理論を以下に述べている。

・・・SCT (*sociocultural theory*) maintains that the development of the uniquely human, higher psychological functions occurs through social interaction, DA researchers・・・have postulated that collaboration with the examinee is crucial to leading and observing development. (イタリック, 著者加筆)

社会文化理論の重要なコンセプトであるDAのキーワードの一つにZPD（発達の最近接領域）がある。生徒の能力の領域を1）独力でできる, 2）支援があればできる, 3）（支援があっても）独力でできない, と3つに分けたとする。Lantolf & Poehner (2014)によればZPDは1）から2）の領域を指し、誰かの支援があればでき領域を対象ととしている。教室内にDAを当てはめるならば教師は生徒に独力でできること、仲間や教師から支援を受ければできることを認識させることが必要である。またどのような支援を与えることがその生徒にとって有益なのか教師は把握することが必要不可欠である。

2.2 学校内の伝統的な評価とDAの比較

学校内でよく使われる評価には大きく分けるとformative assessment（形成的評価）とsummative assessment（総括的評価）がある。前者は生徒が課題やタスクに取り組んでいるときその都度生徒にフィードバックが与えられ、後者は学期ごとなど比較的に中長期の学習者の成果を把握して成績をつけることである (Hughes, 2002)。この意味でDAはformative assessment に近い。なぜならば授業と評価のつながりという意味で形成的評価や診断評価に近いからである (Poehner, 2014; Leung, 2007)。しかし、この二つの決定的な違いをAnton (2012) は、DAは理論

に基づき組織的に生徒へ支援することと指摘している。

表1はDAと伝統的な学校内の評価の比較を示している。最初にDAと伝統的に学校で使用される評価方法 (formative and summative assessment) と共通している点は指導をしながら生徒に何らかのフィードバックを与える点で共通している。その意味で指導と評価は表裏一体であるといえる。

一方、いくつかの点で相違がある。まず、評価の時間軸の対象は、DAは支援があればできるであろう未来の可能性を含めているが、伝統的評価はこれまで学習した内容が習得できているか、過去の学習成果を対象としている。この違いの意味は大きい。なぜならばDAの場合、支援があればできる可能性がある未来も含むことにより評価の継続性が含まれることになる。このことからZPDを活用する際に大切なことは、生徒自身が独力でできることとできないことを気づくことが最初の一步と言ってもいい (Leung, 2007; 東條, 2014)。それ故、DAには生徒が何ができて何ができないかの診断の機能も含む (Lantolf & Poehner, 2014)。

表1：DAと学校内の伝統的な評価の比較

二つのタイプ	DA (Dynamic Assessment)	学校内の伝統的な評価
時間軸の観点	現在から未来への診断	過去から現在までの結果
評価の特徴	動的 (柔軟) ・個別	静的・標準化
重視すること	過程重視	結果重視
評価の焦点	どうすればできるかの加点法	何ができたか (何ができなかったか) の減点法

伝統的な評価とのもう一つの相違は、DAは授業中で生徒ができること（できないこと）が評価の中心で、評価は動的（柔軟）で、個々に実施される。それに対して伝統的な評価はすべての生徒が同じ条件の下でテストを受け、生徒同士や基準により比較され標準化される。これまで独力で何ができるかを評価していた伝統的な評価の考え方はDAの原則とはまったく異なる。又、DAは「どんな支援をすればこれからできるのか」という加点法的発想であり、伝統的な評価は「何ができなかった」という減点法的発想であると言える。DAのDynamicとは柔軟的・機敏に一人一人に合わせて、授業中学習活動をしている生徒に合った支援を柔軟的にすることを意味し、Assessmentは生徒が独力でできる力と支援があればこれからできる可能性がある領域を診断し把握することを意味する。

2.3 中学校英語のクラスにDAを活用する際の課題

中学英語教育にDAを取り入れるメリットは、教師と生徒が各生徒のZPDを把握するためにCan-Doリストを使用することによってより明確な指導目標を提示することができることであり、授業改善につながる可能性がある。何ができ、何ができないかを知るためにCan-Doリストを使用することは理にかなっておりかつ経験や勘だけに頼らず組織的に生徒を支援することができる（文科省、2013）。生徒が困っているときにその生徒の興味やレベルに合ったヒントやサポートなどを授けることはよく見られる授業風景であるが、すべての教師ができることではない。ある意味職人技で、そのような技量が乏しい教師も存在するであろう。ベテランの教師であっても生徒へ支援が何に基づいてなされたかを追跡し再現することは難しい。さらにその支援が適切であったかを知ることはなかなか困難である。そこでZPDの理論的枠組みを使用するこ

とは、教師の経験や勘に頼る評価とは違う。DA理論に基づき組織的に生徒に必要な支援を与えるためには「何ができて何ができないのか」を生徒自身が気づくことが最初のステップある（Lantolf & Poehner, 2014）。

一方、考慮しなくてはならない課題もある。学校でDAを活用しその結果を成績に含めることは現在の枠組みでは困難である。また授業中に指導しながら個人個人に支援することはなかなかできることではない。上記の指導を実施することにより評価を公平に保つことができるのか、さらに実際に運用することは可能なのか様々な問題が存在する。このことからDAを授業で用いるためには、学習指導要領のキーワードである、「ルーブリック」、「振り返り」、「ICTの活用」を意識しながら授業を進めていくことが望ましいと考える。

教育現場にDAを応用することはいくつか予想される課題はあるものの、理論的観点や教育的観点からもメリットが勝っていると思われる。特にDAは評価と指導を連携することが可能でそのことが授業改善につながる可能性が高いと言える。

3. データ収集方法

3.1 研究課題

中学校英語の授業で生徒の振り返りを通じて生徒に自身のZPDに気づかせるために、以下の2つの研究課題を設定した。

（1）英語の授業を受けた中学生はどんなタイプの振りかえりのコメントをするのか？

（2）教師はどのようにすれば生徒に自分のZPDに気づかせることができるか？

まず研究課題1は、生徒の振り返りをその内容によって分類し、量的に分類することで、どのようなコメントがあるのかを明らかにする。そして、研究課題2は、抽出生徒の振り返りを質的に分析し、なぜそのような振り返りになったのかを考察していく。生徒自身の

ZPDにどれだけ生徒の意識が向いたか、又なぜZPDに向けたコメントがなかったのかの理由も探る。そして生徒の振り返りから教師はどのような支援を生徒に与える可能性があるかを考察していく。

3.2 研究協力者

研究協力者は中学3年生47名。学級数は2クラスである。授業はNew Horizon English Course3（東京書籍）におけるUnit0～Unit3までの4単元で、4月～7月の全35時間実施した。

3.3 生徒の実態

実施校の生徒に対し、4月にアンケートを実施したところ、約半数の生徒が「英語が嫌い」または「どちらかといえば嫌い」と回答した。スローラーナー（SL）が多い傾向にある。生徒はこれまでCan-Doリストや振り返りの活用はしてきていない。実際に4月に授業の振り返りを行ったところ、多くの生徒が「楽しかった」、「わかりやすかった」、「難しかった」等の感想程度の振り返りを記述していた。

3.4 実践の概要

これらの実態を踏まえ、本実践では、生徒が自らの学習に対して、「何ができて何ができないのか」を把握し、自らのZPDを意識することができるよう目指すことで、課題に向かって主体的に学習に取り組むことができるようにするために、Can-Doリストをベースとした振り返りを行う。

具体的には、単元の全授業において、Google formを用いて授業の振り返りを行った。また、生徒一人一人の振り返りをポートフォリオに示した。

3.5 分析の手順

生徒の振り返りについては、これまで①学

習内容、②上手くできたところ、③できなかったところ、④改善のための努力目標の4つの視点で振り返りをするよう指導してきた。そこで、2つの単元それぞれにおいて、「学習内容に関する記述」（以下、「内容」）、「何ができるようになったかに関する記述」（以下、「達成」）、「今後に向けて努力したい事項に関する記述」（以下、「課題」）「抽象的な感想等の記述」（以下、「感想」）の4つに分類して量的に比較する。

それぞれのカテゴリにおける生徒の記述は、以下のような内容である。（全て原文のまま、生徒番号とUnit番号はどの生徒がどのUnitについて振り返りをしたコメントかを示している。）

表2：振り返りの記述の分類とその具体例

カテゴリー	主な生徒の記述（生徒番号、学習した単元名）
内容	- 今日の授業では、現在完了形の完了用法を学習した。（生徒19, Unit2） - 今日は文章の読み取りをした。（生徒44, Unit2） - 今回は単元で学習した内容をもとにして文章を作成する回だった。（生徒11, Unit3）
達成	- プリント全問正解しました。for と since の使い分けがしっかりできました！（生徒10, Unit2） - 何回も友達と話して大変だったけど少し英語で会話できる範囲が広がった気がした。（生徒3, Unit2） ～してほしいという文をしっかりと理解することができたので良かったです。教科書に書いてあることを大体理解することができました！！（生徒13, Unit3）

- 課題
- ・どのように相手に質問したらいいのかわからなかったのでしっかり質問できるようにしたいです!! (生徒 13, Unit2)
 - ・ステップアップ全部当たって良かったです。最後の質問文の問題が少し難しかったので、色々な問題で練習したいです。(生徒 1, Unit3)
 - ・教科書に載っている文に当てはめて書いているだけだから、今までに習った文の表現を用いて自分の考えをもっと書けるようになりたい! (生徒 19, Unit3)

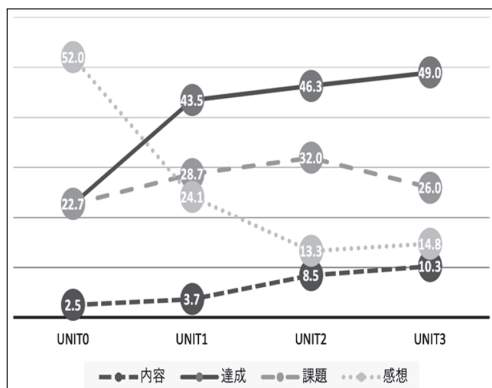
- 感想
- ・間違えた (生徒 26, Unit3)
 - ・難しかった (生徒 24, Unit1)
 - ・単語がわからなかった。(生徒 17, Unit1)

4. 分析と結果

4.1 振り返りの量的分析

図1は生徒の振り返りを4つの単位における生徒の振り返りの記述を先に挙げた4つのカテゴリに分類し、その変化をグラフに表したものである。単元が進むにつれて、「感想」に関する記述が減少し、「達成」や「課題」に関する記述が増加していることが分かる。また、「内容」に関する記述においては、やや増加傾向にあることが分かる。

図1：単元ごとの生徒のコメントが占める割合



Unit 0 (4月頃) からUnit 3 (7月頃) に変化があったかどうかを調べるためにt検定を行った。その結果、「達成」に関する記述 ($t(47) = -2.37, p=0.02, r=-0.38$) については有意な差が見られた。一方で、「課題」($t(47) = -0.82, p=0.41, r=0.08$) 及び「感想」に関する記述 ($t(47) = -0.12, p=0.91, r=0.04$) では有意な差が見られなかった。

このことから、Can-Doリストと組み合わせた振り返りを行い、先に挙げた①～④の視点を与えたことにより、生徒は「何ができるようになったか」について、より具体的に自身の学習を振り返ることができていたことが分かる。

4.2 生徒同士の振り返りの比較

表5は、授業で達成できたことについてよく記述できていた生徒 (生徒A) と感想程度の記述が多く、あまりよく記述できていなかった生徒 (生徒B) の振り返りの一部を単元ごとに比較したものである。(全て原文のまま)

表5：生徒同士の振り返りの比較

生徒	生徒 A	生徒 B
Unit0	・友達にちゃんと質問することができました!! ・音読も頑張りたいです。 ・自分で調べたことをしっかりプレゼンすることができたので良かったです!! ・今度はもう少し詳しく発表できるようにしたいです。	・音声のヤツが上手く出来なかった ・みんなと相談したりする時間があって楽しかった ・スピーチはよくできたと思ったけど滑舌が悪すぎて伝わらなかった (泣)

Unit1	・ 現在完了形を使って友達に質問したり、答えたりすることができたので次も頑張りたいです！！ ・ 自分なりにしっかりメモを作ることができたので良かったです！！次は文を作れるようにしたいです。	・ 人称代名詞ができなかった。 ・ 書けたけど、スペルまちがいが多かった。
Unit2	・ 質問をして、答えたりするときにひと工夫加えて答えることができたので良かったです！！まだあまり会話を広げることができないので頑張りたいです。 ・ まだしっかり答えることが出来なかったけど、色々な表現を使って会話を続けることができました。次はリアクションをできるように頑張りたいです。	・ 現在完了形のプリントの2番の(4)の英文がありません出来なかった ・ 現在完了進行形で(あなたどのくらい英語の勉強してるんですか?)という文があんまりわからなかった
Unit3	・ 絶滅のおそれがある動物についての紹介文を詳しく書くことができた！！ ・ It is for 人 + 動詞の原型の文や want + 人 + to 動詞の原型の文の形をしっかりと理解して紹介文に取り入れて Unit3 の文法を覚えることができた。	・ 英文が間違えた ・ 文の作り方がやっぱり難しかった。

それぞれの記述を比較してみると、生徒AはCan-Doリストをもとに、「現在完了形を使って友達に質問したり、答えたりすることができた」、「色々な表現を使って会話を続けることができました」等、何ができるようになったかについて多く記述することができている。一方で、生徒Bは「人称代名詞ができなかった」、「英文が間違えた」等の記述が多い。生徒Aは達成できたことについて記述することができているものの、ZPDに関わるような、自身の課題についてのコメントは若干認められる。例えばUnit2の「現在完了形を使って友達に質問したり、答えたりすることができたので次も頑張りたいです！」は、自分が何をできたかを言及しているが、次回、さらに何をしたいのかについては言及されていない。いわば、ZPDを明確に意識はしていない。いわば、ZPDを明確に意識はしていないコメントのようだが、教師の工夫次第ではZPDを意識できる可能性があるコメントととらえることもできる。(詳細は次のセクションで述べる。)生徒Bは、達成できたことに対する記述は少ないものの、単元が進むにつれて、授業でできなかったことや、自身の困り感について、少しずつ具体的に記述することができている。上記の結果は生徒Bも時間とともにより具体的なコメントができるようになってきたことを表している。そしてZPDを生徒に意識させるためには教師が生徒のZPDに向くような指導が必要であることを示している。

4.3 抽出した振り返りの質的分析

表6はUnit2及びUnit3の生徒の振り返りの一部を抜き出したものである(全て原文のまま)。それぞれのコメントに触れる前に、まずは各Unitの内容を説明する。Unit2の単元のCan-Doリストは「ずっと好きなことや、これまで取り組んできたことについて伝え合うことができる。」、Unit3は「絶滅のおそれのある動物について、調べた内容をもとに簡

単な語句や文を用いて記事を書く事ができる。」である。この二つの主な違いは、前者は伝え合うことができるような相手を意識する単元の目標であることに対して、後者は自分で記事を書くことができる、のように自己完結型の目標である。

それぞれの生徒の記述を比較すると、自身の課題に対する記述に違いがあることが見て取れる。具体的には、Unit2では、「もっとリアクションが入れられるといいな—と思った」や、「もっと使える言葉が増えれば内容が深まるかもしれない」など、コミュニケーションにおける相手を意識した記述が見られる。一方で、Unit3では、「教科書を参考にしながら、文を作れました。」、「絶滅のおそれがある動物についての紹介文を詳しく書くことができた！！」等、Can-Doリストにもとづき何ができるようになったかを記述することはできているが、そこからZPDに関わるような、自身がさらに何ができるようになりたいのかについての記述があまり見られなかった。このことから、教師が設定する単元のCan-Doリストが、コミュニケーションにおける相手を意識する必要がある内容になっていれば、生徒は相手とのより良いコミュニケーションのために、自身がどうなりたいたのかを考えるようになり、今後の課題について記述するようになるのではないかと考えることができる。

表6：Unit2 及び Unit3 の生徒の振り返りの一部

生徒 A	生徒 B
前より会話できた。 もっとリアクションが入れられるといいな— と思った。(生徒5)	文法は理解できたので良かったです。けれどたまに、for と to などがごっちゃになるのでしっかり復習したり、練習問題で定着させたいです。(生徒1)

質問は、まあまあ出来ました但答えるのが少し苦手でした。単語の意味を理解できるようにになったら**もっと喋れるのかな**と思いました。(生徒8)

自分で動物を決めてそれについてよく調べて書いた。Unit3で学んだことを使って書くことができた。(生徒6)

まだしっかり答えることが出来なかったけど、色々な表現を使って会話を続けることができました。**次はリアクションをできるように頑張りたいです。**(生徒13)

自分で決めた絶滅の動物を選び、それについて調べられました。教科書を参考にしながら、文を作れました。(生徒9)

最後には会話をはじめよりも続けることができるようになった。でも、**もっと使える言葉が増えれば内容が深まるかもしれない**なと思った。(生徒16)

絶滅のおそれがある動物についての紹介文を詳しく書くことができた！！It is for 人 to + 動詞の原型の文や want + 人 + to 動詞の原型の文の形をしっかりと理解して紹介文に取り入れてUnit3の文法を覚えることができた。(生徒13)

文法の形を理解することや、それを用いて会話することができた。**プリントを見ないで自分の力で話せるようになりたい。**文法の形を理解するのは当然として、**使い方や使う場面などもきちんと確認**していきたいと思います。(生徒19)

一つ一つの key sentence にしっかりと取り組むことができた。ワードごとや文全体を見たりして、本文の内容を理解することができた。絶滅危惧種について調べて key sentence を用いながら文章をまとめることができた。(生徒16)

表6のUnit 2の太字のコメントは、どれも次に自分が何をしたいのか、どのようになりたいのかをはっきりと書いているように思える。これはZPDに関連するようなコメントにも見えるが、具体的なものではなく、どんな支援を得るべきかについても言及されてい

ない。生徒が自身のZPDを意識し、支援を受けるまでの道筋を教師はさらに工夫する必要がある。このことについては「これからの研究課題」のセクションで触れる。

5. 考察と結論

(1) 英語の授業を受けた中学生はどんなタイプの振り返りのコメントをするのか？

本研究の目的は生徒の授業の振り返りのコメントを活用し、DA理論に基づき適切に生徒へ支援することの可能性を検討することであった。DAを応用する場合に大切なことは、生徒が独力でできる領域を教師と生徒が把握し、それをもとに教師がその生徒にどんな支援ができるか検討し、必要な足場かけを実践していくことである。そのためには教師は各生徒のZPDに気づかせる必要がある。気づかせる方法として今回はGoogle form を利用して毎時間、教師は生徒の振り返りをモニターした。

生徒の振り返りのコメントを4つのカテゴリーに分けて時間の経過とともに振り返りをした。研究課題の1の主な結果は、「内容」と「課題」はあまり変化がなかったが、「感想」は減り、「達成」は大幅に増えた。このことの意味は生徒が学習内容の目標に意識が向き、ただ単に感想を書く生徒が減ったことを意味したことを示唆する。生徒の意識はCan-Doリストに集中し「達成」の振り返りが増加したと考えられる。つまり、ただ感想だけに終わっていたのがだんだんと自分ができたことについてコメントする生徒が増えてきていた。その意味で教師の指導した意図は生徒に理解させることができていたと考えられる。

一方、特にZPDに関係があるコメント（達成と課題）を中心にみると、生徒がZPDに関する意識はまだそこまで及んでいないことが

分かる。例えば、達成に圧倒的に多いコメントは当然のことながら本日の目標に関してできたかそうでないかのコメントである。そして課題の多くのコメントは達成できなかったことへの課題が書かれていて生徒が支援をしてもらえばできるであろうZPDを意識することから離れてしまった結果になった。

(2) 教師はどのようにすれば生徒が自分のZPDに気づかせることができるか？

今回の実践では、Can-Doリストを使った振り返りを通して、毎回の授業で「何ができるようになればよいのか」を明確にして授業を行った。その結果、単に授業の「内容」や「感想」のみを記述する生徒は少なくなり、その授業で何ができなかったかを記述する生徒が増加した。このことから、Can-Doリストを使った振り返りにより、生徒が自身の現在地を把握することにつながったのではないかと考えられる。また、教師が生徒に授業で達成してほしい内容と、生徒の振り返りによる記述がより一致するようになったことは、指導と評価の一体化がより図られた結果であると考えられる。

一方で、ZPDは生徒の現在地だけでなく、「もう少しでできそうなところ」も含むため、今回の実践では、生徒にその部分をうまく記述させることができなかった。これは、Can-Doリストが達成目標のみを示すものであることが理由として考えられる。今後、生徒に「もう少しでできそうなところ」を意識させるためには、ループリック等の次の達成目標の指標を教師が生徒に提示することの必要性が考えられる。

さらに表6の結果が示すことは、生徒に自身のZPDに気づかせるためには、生徒にコミュニケーションを意識させるようなCan-Doリストの工夫が必要であろう。現学習指導要領の観点別評価で言うならば、Can-Doリス

トが「達成」に重きが置かれている場合は「知識・技能」に関する目標が多く、ZPDに関するコメントは減少するであろう。生徒のZPDを意識させるためには、生徒が英語をどのように使って相手に伝えればよいかを考え、挑戦できるような授業目標を設定することが必要である。そうすることが生徒の思考・判断・表現を育成につながると考える。

6. 結論とこれからの研究課題

本研究は応用言語学や教育現場で比較的新しい理論であるヴィゴツキーのDA理論の中心的なコンセプトであるZPDを中学校の英語の授業に応用し、生徒はどのように振り返りをし、どのようにして生徒のZPDに気づかせることができ、どのように教師は生徒に支援を与えることが可能であるかを調査した。結果と考察からDAの理論はこれからの研究課題はあるものの、これまでの伝統的な評価とは違った視点で生徒を把握することの可能性が高まることが示唆された。そして生徒の次の可能性を意識することにより、いっそう評価と指導の連携ができるかもしれない。以下にこれからの研究課題を記す。

本研究では、Can-Doリストと振り返りを連携させたことにより、生徒の振り返りの視点を明確にできるようにした。結果として、生徒は「何ができるようになったか」を記述することができるようになったものの、「独力ではできないが、支援があればできそうなところ」、つまりZPDに関わる内容を課題として記述するまでにはいたらない生徒も多かった。このことから、Can-Doリストだけでは十分に生徒にZPDを意識させることができるとは考えにくい。

これからの課題としては、単元の目標に対してそれぞれの生徒がどの段階にあるのかという、教師の中にあるルーブリックを生徒と共有し、さらにできるようになるにはどうす

れば良いか生徒に気づかせるための足場掛けが必要であると考えられる。例えば、Poehner & Yu (2021) は、書くことのDAにルーブリックを指導介入ツールとして導入し、DAでの介入前後に学習者の書いたものへのルーブリックでの評価がZPDの評価に役立つか、及びDA中のルーブリックへ教師が書き込んだ注釈が学習者の潜在的な能力の診断に貢献するかを検証した。その結果、介入前後の学習者のエッセイの分析結果から学習者の潜在的な能力を明らかにすることができたとし、DAでのルーブリックの活用は、学習者の潜在的な能力、つまり現時点では独力ではできないがもう少し努力すればできる様になりそうなところをリアルタイムに注釈するツールとなり得るとしている。このように、ルーブリックを活用し、生徒にどのような支援が必要かについて具体的に検証していくことが今後必要である。もっと大きな観点から述べるならば、評価と指導の連携は密になる可能性が高いDAであるが、このことを学校内で多く使用される成績にどのように取り入れるのか、また取り入れる必要があるのかがこれからの研究課題である。

引用文献

- Anton, M. (2012). Dynamic assessment, The Routledge Handbook of Language Testing, Fulcher, G & Davidson, F (eds), pp106119. Routledge.
- Cumming, A. (2009). What needs to be developed to facilitate classroom-based assessment? *TESOL Quarterly*, 43, 3, pp515-519
- Hughes, A (2002). *Testing for Language Teachers (2nd edition)*, Cambridge University Press.
- Lantolf, J.P. (2009). Dynamic assessment: The dialectic integration of instruction and assessment. *Language teacher*, 42

(3) , 355-368

Lantolf, J.P. and Poehner M. E. (2014).
*Sociocultural Theory and the
Pedagogical Imperative in L2
Education: Vygotskian Praxis and the
Research/Practice Divide*. Routledge.

Leung, C. (2007). Dynamic Assessment:
Assessment for and as Teaching?
Language Assessment Quarterly, 4
(3) , 257-278

Poehner, M. E., and Yu, L. (2022). Dynamic
Assessment of L2 writing: Exploring
the potential of rubrics as mediation in
diagnosing learner emerging abilities.
TESOL Quarterly, 56(4), 1191-1217

Poehner, M. E. (2014). Dynamic assessment
in the classroom, *The Companion to
Language assessment*. J. Kunnan (eds),
Jhon & Sones.

Poehner, M. E., and Lantolf, J. P. (2005)
Dynamic assessment in the classroom.
Language Teaching Research, 9 (3),
233-265

Vygotsky, L. S. (1978). *Mind in society: The
development of higher psychological
processes*. Cambridge, MA: Harvard
University Press.

東條弘子 (2014)「外国語教育研究における
社会文化理論の布置」関東甲信越英語教
育学会誌, 28, 69-82.

文部科学省 (2013) 各中・高等学校の外国語
教育における「CAN-DOリスト」の形で
の学習到達目標設定のための手引き. 各
中・高等学校の外国語教育における
「CAN-DOリスト」の形で学習到達目
標設定のための手引き (mext.go.jp)

参考資料 1 生徒 A の振り返りシート

(達成の記述が多かった生徒)

New Horizon English Course3

Unit3 Animals on the Red List

No. XXXXXXXXXX

Name XXXXXXXXXX

【題材】世界の絶滅のおそれのある動物について知り、自分たちにできることを考える。

【活動】自分の意見や考えを加えて記事を書くことができる。

No.	Part	CanDo	Reflection
1	Sc1	It for toの文の形・意味・用法を理解することができる。	自分が探求したいテーマについてしっかり考えることができました!!
2	Sc1	絶滅のおそれのある動物について調べ、自分の探求したいテーマを設定することができる。	文法をしっかり理解することができたけどプリントの2の(4)がわからなかったので復習したいです。
3	Sc2	want+ 人+ toの文の形・意味・用法を理解することができる。	Want人 to 動詞の原型の文の作り方がわかった!
4	Sc2	してほしいことについての対話の内容を捉えたり、伝え合ったりする事ができる。	～してほしいという文をしっかり理解することができたので良かったです。教科書に書いてあることを大体理解することができました!!
5	RT1	let+人+動詞の原形やhelp+人+動詞の原形などの文の形・意味・用法を理解することができる。	流暢さを意識した音読を心がけることが出来ました。今日初めて知ったことがたくさんあったのでしっかり覚えたいです!
6	RT1	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、概要や要点を捉える事ができる。	流暢さだけでなくアクセントにも気をつけて文を読むことができたので良かったです!
7	RT2	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、その因果関係を捉える事ができる。	話の大体の流れを掴むことができました。各質問にもしっかり答えることができたので良かったです!
8	RT2	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、概要や要点を捉えて相手に伝えることができる。	絶滅危惧種についてたくさん調べることができたので良かったです。もう少し詳しく調べられるようにしたいです!!
9	UA	絶滅のおそれのある動物について、調べた内容をもとに記事の構成を考える事ができる。	Ietを使った文の形をしっかり理解して問題を解くことができました!!
10	UA	絶滅のおそれのある動物について、調べた内容をもとに簡単な語句や文を用いて記事を書く事ができる。	Unit3で習った表現もしっかり使って紹介文を書くことができたので良かったです!! もう少し詳しく書きたい…!!

【単元の振り返り】

- ①絶滅のおそれがある動物についての紹介文を詳しく書くことができた!!
- ②It is for 人 to+動詞の原型の文やwant+人+to動詞の原型の文の形をしっかりと理解して紹介文に取り入れてUnit3の文法を覚えることができた。
- ③単元の重要語句や単語を覚えることが出来なくて本文を読んでわからない所があった。
- ④まず最初に単語をしっかりと覚えて本文をちゃんと理解しながら読めるように単語練習頑張りたいです。

参考資料2 生徒Bの振り返りシート (感想の記述が多かった生徒)

New Horizon English Course3

Unit3 Animals on the Red List

No. XXXXXXXXXXName XXXXXXXXXX

【題材】世界の絶滅のおそれのある動物について知り、自分たちにできることを考える。

【活動】自分の意見や考えを加えて記事を書くことができる。

No.	Part	CanDo	Reflection
1	Sc1	It for toの文の形・意味・用法を理解することができる。	間違えた
2	Sc1	絶滅のおそれのある動物について調べ、自分の探求したいテーマを設定することができる。	英文が間違えた
3	Sc2	want+人+toの文の形・意味・用法を理解することができる。	特徴は分かったけどその特徴の英単語がわからないやつがあった
4	Sc2	してほしいことについての対話の内容を捉えたり、伝え合ったりする事ができる。	単語で読めないところがあった
5	RT1	let+人+動詞の原形やhelp+人+動詞の原形などの文の形・意味・用法を理解することができる。	英単語や英文の練習を夏休みをしたい。
6	RT1	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、概要や要点を捉える事ができる。	プリントでわからないところがあった
7	RT2	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、その因果関係を捉える事ができる。	英文の中の単語を復習したいです。
8	RT2	絶滅のおそれのある動物についての文章を読み、概要や要点を捉えて相手に伝えることができる。。	疑問詞ありの方の勉強が必要だと思った
9	UA	絶滅のおそれのある動物について、調べた内容をもとに記事の構成を考える事ができる。	アマミシカワガエルの総個体数など調べることができた
10	UA	絶滅のおそれのある動物について、調べた内容をもとに簡単な語句や文を用いて記事を書く事ができる。	絶滅危惧種に関する英単語をたくさん学んだし絶滅の危機に直面している動物が思ったより多かったのがびっくりし

【単元の振り返り】

英文やけっこう長い英単語を覚えたい(苦手なやつ)